

## 「小中一貫校」はやめる つくば市の決断に注目

### 市内全域に導入方針

### 新たに小6問題

茨城県つくば市では、2012年に、市内全校に小中一貫教育の導入を方針に掲げました。2012年にモデル校として開設し、2016年から義務教育学校春日学園となった小中一貫校は、児童生徒数2000人を超え、1年生9クラスと、日本最大規模の義務教育学校になりました。

### 検証と見直し

しかし、2016年から市長が替わり、新しく任命された教育長のもとで、小中一貫校の検証と見直しが開始されました。

ただし、前市政のもとで決定された筑波秀峰学園は、すでに工事が着手されていたため、2018年に開校され、他の2校の義務教育学校も開校されました。

つくば市の「小中一貫教育検証委員会」は2年間、教育学者や心理学者による調査がおこなわれ、調査報告書「つくば市の小中一貫教育の成果と課題」（2018年7月）が出されました。

児童生徒へのアンケートやヒアリングで、施設一体校では新たに小6問題が顕在化していること、

同じ小中一貫教育でも、小学校と中学校が分離していた方が教育効果が高いということ等です。

### 立谷沢出身の門脇厚司氏

その教育長は、筑波大学名誉教授の門脇厚司氏で、庄内町立立谷沢の出身。『子どもの社会力』（岩波新書）など多くの著書があります。

門脇教育長が3年の任期を終える直前に、つくば市教育振興基本計画策定委員会に「素案」を提出しています。そこには次のような記載がされています。

○小中一貫教育の全校実施は改める。  
○義務教育学校の新設はしない。

○学校の新設に当たっては、小学校と中学校の分離を原則とし、適正規模の保持を厳守する。

○義務教育学校は、小学部と中学部それぞれの特性を生かした教育を行う。



門脇厚司氏は、「5校目の義務教育学校はつくらない。」

「小中一貫校は小学6年生を終えても卒業式もないし、中学生になる際に入学式もない。これからは小学部の卒業式も中学部の入学式もきちんとやる。」

「子どもたちをみんなスクールバスに乗せて、地域の生活の場から切り離してしまつたら、社会力を育てる教育はできない。」

「小学生に導入している教科担任制も、受験体制を強化するためのもの。でも小学校の担任の先生は、そういう意識で授業をやっているわけではない。小学校6年間を通して、どういう子どもに育てようかと考えて指導している。」と語っています。

## 村の四季

15

鈴木重雄（八色木）

### ■紙芝居

桜の花も散り、庄内平野の田んぼは、黒土色が耕起されて茶褐色に変わる。

一面に水が漲り銀色に光る頃、小学校も新学期に入り、子どもたちは新しい仲間も増えて、村の中は遊び声で賑やかになる頃、紙芝居屋が村にやってくる。

紙芝居は、子どもたちが学校から帰り、夕食までの遊びに興じている頃にやってくる。みんな紙芝居屋のおじさんが来る時間を知っていた。

八色木は、薬師さまと、永慶寺の大山門であった。薬師さまは、本堂にあがる階段に並び、雨が降ってもぬれることなく安心であった。寺の大山門は階段はないが、広くゆっくり見ることが出来る。

豊業は、諏訪神社の仁王さまが入っている山門か、ポンプ小屋の前であった。小中島は警鐘台の前か、神社の山門だと思う。

紙芝居を見せてくれるのは、藤島下町の三浦勇さんであった。三浦さんの家は雲に優れ、戦後の荒廃した時代に、村祭りや地区演芸会に出演して、農村娯楽に貢献した劇団一家であった。

自転車の荷台の四角い箱に、道具を乗せてある。村の入口から拍子木をカチンカチンと打って、薬師さまに

て準備を始めると、子どもたちは拍子木を借りて近くを回ってくる。子どもたちが一巡した頃に準備が整い、さあ始まりである。

まず、自転車の荷台の引き出しから水飴をたぐりあげ、割り箸にまきはじめる。左手に箸を持ち上げて右手で箸にまきつけると、風車のような形に出来上がる。子どもたちは手際の良さで、てろてろと光った飴の色を見ながら自分の番を待つ。

みんな10円玉を汗ばむほど握りしめ、飴と交換する。紙芝居のおじさんは、行き渡ったのを確かめて紙芝居の扉を開く。

活弁よろしく子どもたちを紙芝居の世界へ引き込んでいく。なかにお金の持ち忘れた子どもは、一番後ろの席で背伸びして見ている。紙芝居のおじさんは、ただで見ている子どもに目くじらを立てることとはない。むしろ遠慮して見ている子どもを愛しく思っている。

紙芝居のおもしろさは、何ととっても機械映像を媒介せず、手と肉声で実演するおもしろさであった。

今、街頭で紙芝居を見ることがなくなった。経済成長と共に紙芝居をする人がいなくなったからであろう。少子化とテレビゲームに熱中し、外で遊ぶ子どもがいなくなった。



# 大軍拡で平和は守れない

## 共産党市議団が意見書

共産党鶴岡市議団は9月議会に「防衛費を『GDP比2%』に増額することに反対する意見書」を提案しています。

「防衛費の増額は、東アジアに緊張を呼び込み、日本経済をいっそう落ち込ませてしまう」と指摘しています。

## 台湾でドンパチ。

『朝日新聞』デジタル版9月1日付に、「台湾でドンパチ。日本に戦争起きる」が掲載されました。



記事は、「自民党の麻生太郎副総裁が8月31日、麻生派の研修会で講演し、台湾有事を念頭に、「沖縄、与那国島にしても与論島にしても台湾でドンパチが始まることになれば戦闘区域外とは言い切れないほどの状況になり、戦争が起きる可能性は十分に考えられる」と語り、日本国内で戦争が起きる可能性に言及した。」とのこと。

## シミュレーション

その前には、『朝日新聞』デジタル版8月7日付に、「台湾有事、そ

の時政府は… 元防衛相らがシミュレーション」が掲載されました。



記事は、「防衛相経験者や元自衛隊幹部が参加して台湾有事を想定したシミュレーションが6、7両日、東京都内で行われた。」

シナリオの時代は2027年。「台湾有事」と同時に、尖閣諸島に中国の武装漁民が上陸する「複合事態」が発生。

# ひと

## 村山俊太郎・ひで夫妻

青山 崇

### ■結婚

往復書簡集『この魂ひとすじに』10月31日付ひでの手紙の一文である。

「あなたに、おあいしに行く今、私はじっと目を閉じている。髪を結いながら、今日おあいする、あなたを感じている。なんだか、胸が苦しいなあ、じっと祈りたいような心になつて仕舞った。もう十二時、私はいこう。あなたと、おあいするいい秋晴れの日、赤いりんこの木の下で二人はあえました。」

小野寺五典元防衛相が首相役を務め、国家安全保障会議(NSC)が開かれ、安全保障関連法に基づき、尖閣に「武力攻撃事態」、台湾に「存立危機事態」がそれぞれ認定され、自衛隊に防衛出動が下命されるといふ想定です。

## 平和外交の道

軍事力と軍事同盟で「平和」は実現出来ないのは、ロシアのウクライナ侵略で明らかです。

どうやって日本とアジアの平和を実現するか。

九条改憲と大軍拡をストップし、紛争を武力によらないで解決する平和外交の道しかありません

ほぼ結婚が決まった手紙である。しかし様々な障害があった。「私たちの結婚はむずかしかった。村山が免職で失業中、新聞を賑わしたアカイ教員であった。私も父のいない家計(父は1929年病死)を支えなければならなかった。」

しかし「勇敢にこの問題を解決しようとした。」

《一生に一度の雄弁家になる夜がきた》(ロシア小説・綿)、「この言葉を胸にかみしめて、表面は静かなかたちで炬燵にあたりながら、

村山と結婚したいと母に打ち明けた。

「共産党・アカイ教員といわれている恐ろしい人と結婚したいというのか!」泣き出してしまった母。母から聞いて駆けつけた姉も同じだった。「共産党に嫁にやる家とは絶交だ」とも言われた。

俊太郎の家でも大変心配して、父が嫁さんに苦勞をかけるからと正式に断りにきたりした。

結局、母を説得して1933年4月15日、現天童市山口730の



### ■点検と言えない

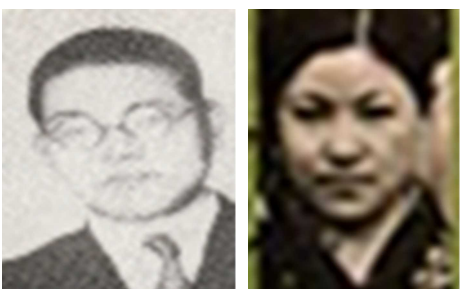
あんなに小ぢやかな物よく見つけてくれたもんだ、という癪たから、大きな手術にならずに済んだ。その後何年も何ともないと言う話を聞いている。これ協立病院での事。

▲これは私事になるが、これも協立病院での話。毎年一泊でドックを受けているが、胃カメラで、世間でよく言う「ひつかかった」と言う状況。俺は、悪い処を探して治すための検査としてドックを受けているんだから、ひつかかったとは言わないが、組織を採取したんだ。

▲採取時も悪いものとは思わないと言う医師。一応調べて見ながらや・と言うものだったが後日、実際悪いものではなかったというが、半年経つたらもう一回調べよう・というのが10月なのだ。中には、

俊太郎の生家で結婚式を挙げた。

結婚後は、ひでの事情から、俊太郎は山形市で記者生活、ひでは東根の実家から学校に通勤という別居生活であった。



悪くなるのもあるんだと。専門家が、細心の注意での診立てだ。

▲比べてどうだ。自民党の旧統一教会との癒着の点検は。もうびっくりするほどの状況です。自分の事を自分が判断するんだから、人数分だけ診立てがあるんじゃないの。やっぱり同じ目で見ないことには点検にもならないでしょう。

▲そのデタラメさについて言われているんですよ。自己申告を鵜呑みにしているから、無意味な調査だよ。正直者がバカを見た感じ。一方、アベと細川議長には手が出ていない。自己申告でなく第三者団体で調査を・とも。

▲これが点検をした者だ。自民党の中の声なんだ。幹事長どうする? お茶を濁す・にもなっていないという事なんだ。デタラメさ加減で支持率が落ちるのは当然さ。(石川)